

# 帆 檣 成 林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.12

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージさせる言葉です。

## CONTENTS

- ◆特集1 みなとぴあの企画展ができるまで P.2・3
- ◆特集2 平成十九年度むかしのくらし展 食の風景—食を支えた道具たち— P.4
- ◆特集3 反省を機に著作権を考える P.5
- 常設展示室から 収獲の風景ジオラマ P.6
- おすすめの一冊 『酒を語る』 P.6
- 館長日記 抜荷で結ばれた鹿兒島と新潟 P.7
- 収獲資料紹介 信濃川新洲相論に付き沼垂町他認出掛紙かぶせ絵図 P.7
- みなとぴあの人・人 企画受付 P.8



解説を読んだ読者、傍で静かに控えるボランティアの微笑。視線の度を加えた常設ガイド、好評です。

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
帆 檣 成 林  
Vol.12

## 新潟市歴史博物館の催し物

2008年2月～2008年4月

企画展	イベント・講座	体験プログラム
2月 11.23～ 食の風景—食を支えた道具たち— 2.24	3日 暮らし探検講座① 9日 企画展開連講演会 10日 暮らし探検講座② 17日 暮らし探検講座③ 24日 博物館講座	2日 節分を楽しもう 16日 みなとぴあで自然を感じてみよう 23・24日(2日連続) わらざりづくり
	3月 3.8 収藏品展・新収藏品展 4.6 4.19 蔵—近代の新潟と通造り— ～6.7	2日 館長講座① 9日 館長講座② 16日 館長講座③ 23日 館長講座④
4月	23日 博物館講座	12・13日 まが玉づくり 19日 ネイチャーゲーム

※詳細につきましては、当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。

## 第4回 むかしのくらし展 食の風景—食を支えた道具たち—

■会 期	～2月24日(日)迄	■開館時間	9:30～17:00 (観覧料の販売は、閉館30分前まで)
■観 覧 料	大 人 500円 大学生・高校生 300円 中学生・小学生 200円	■休 館 日	月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、 祝日の翌日
■団 体	400円		
■資料代	100円		
■定 員	50人		

毎月第4日曜日、当館学芸員の最新の研究成果を報告します。  
■会場/博物館本館2階セミナー室  
■資料代/100円  
■定 員/50人

◎テーマ『船と船大工』展補遺(仮)  
(岩野学芸員)  
日時/2月24日(日) 13:30～15:00  
終了した平成19年度特別展「船と船大工」を通して見えてきた課題、また十分に紹介することができなかったテーマについてお話しします。

## 2007年度 館長講座「環日本海地域の諸民族の興亡」

日	テーマ	講 師	■時 間/13:30～16:00
3/2	「東北アジアの諸民族と国家の興亡」	白石典之氏 (新潟大学地域研究機構教授)	■会 場/博物館本館2階セミナー室 ■定 員/90名 ■資料代/500円
3/9	「日本古代国家の外交と辺境支配」	佐藤 信 氏 (東京大学大学院・文学部教授)	■申込み/2月19日(火)(必着) 往復はがき・電子メール・FAXにて、住所・氏名・電話番号を明記の上、博物館へ。 ※FAXの方は返信用FAX番号を明記ください。応募多数の場合は抽選となります。
3/16	「東北の城柵と蝦夷の反乱」	工藤雅樹氏 (福島大学名誉教授)	
3/23	「激しく移動する列島の南北の境界線」	甘粕 健 氏 (新潟市歴史博物館館長)	

## みなとぴあの人・人

No.12 企画受付 永松 祐子

みなとぴあでは、年間4回の企画展が開催されます。私達は、この企画展の会期中の受付と、展示室での監視業務を担当しています。お客様が安心して観覧できる環境と、展示物の保護にも気遣いながら仕事をしています。



企画展は、新潟市の歴史・文化を中心に構成されています。新潟市在住ですが毎回知らないことが多く、担当学芸員に質問したり、本を読んで勉強をしています。時には、お客様から直接伺うお話が得難いものになりま

す。企画展では、新潟市民の思い出が詰まったモノがたくさん展示されます。多くの皆様に観ていただきたいと思ひます。



## 2007年度「暮らし探検講座」

ちょっと昔の暮らしの道具を観察し、現代の私たちの暮らしを考えてみます。  
■日 時 2月3日(日)・10日(日)・17日(日)  
14:00～16:00  
■会 場 博物館本館2階セミナー室  
■定 員 15人  
■申 込 み ご希望の方は、博物館までお問い合わせ下さい。

## 収藏品展 「はきもの—みなと町の下駄文化—」 新収藏品展

■会 期 3月8日(土)～4月6日(日)  
■観 覧 料 無料  
■開館時間 9:30～17:00  
(観覧料の販売は、閉館30分前まで)  
※4月1日以降は18:00までとなります。  
■休 館 日 月曜日(月曜日が祝日の場合は火曜日)、  
祝日の翌日

## 編集後記

「帆檣成林」第12号、いかがでしたか。今号は特集3本立ての、読み応えのあるものとなっています。じっくりと読んでいただければ幸いです。  
1月25日に文化財防火デーの消防訓練が行われました。旧新潟税関庁舎で火災が発生し、けが人が出ているという設定の下、消防車が駆けつけて消火と救助を行うという本格的な訓練です。荒天の中、来館者の避難誘導や初期消火などを実地しながら緊張感を持って行いました。文化財を後世に伝えるため、みなとぴあはこのような活動にも取り組んでいます。(土田)

◆申し込み・詳細につきましては当館HP、または博物館までお問い合わせ下さい。  
○お問い合わせ先  
新潟市歴史博物館  
〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
TEL:025-225-6111 FAX:025-225-6130  
URL: http://www.nchm.jp  
e-mail: museum@nchm.jp



# みなとびあの企画展ができるまで

森 行人

## 1、はじめに

企画展とは、ある期間、特定のテーマで開催する展覧会です。みなとびあでは、企画展をもっとも重要な事業の一つと位置づけ、年に4回開催しています。今回は、あまり表に出ることのないみなとびあの企画展制作過程をご紹介します。

企画展の仕事は、おおまかに三つに分けることができます。一つ目は、展示テーマに定めて、それに関わる資料を準備すること。二つ目は、その展示する資料を通して、展示テーマを十分に来館者に伝えること。三つ目は、企画展を事業として成立させ運営することです。以下にそれぞれの仕事を紹介します。

## 2、資料を準備する

企画展の展示資料は、展示テーマごとに探し、集め、展示し撤収します。

一例として、秋に開催した「船と船大工」展の作業をみていきましょう。(以下「船展」) まず企画展に向け船の調査研究を進めました。ここで行う調査研究は、文献や聞き書き調査を通じて事例を集積し、先行研究の成果を検討して、さらに論理を展開するという作業です。当館では、開館前から木造船船に関するデータを蓄積してきたので、それらを企画展にむけて、再構成していく作業になります。これらの作業を

とおして、新潟の木造船船の持つ多様性と、それが新潟の歴史において持つ意義の重要性があらためて確かめられました。次に、この成果を企画展という形で表現するため、展示空間に配置する資料を検討する段階に進みます。

### ①資料調査

展示資料の候補は、まず当館所蔵資料から探し、さらに他の博物館の所蔵資料を調べて、リストアップしていきましました。また様々な文献にあたつて、基礎的な資料がどこにあるのか、あるいは研究者や船大工など人のつながりをたどつて展示可能な船や船大工道具を調べました。

これらの作業が終わると、実際に資料のある資料館や木造船船が現存している浜に出かけて、その資料を調査しました。伝えたいことを示す資料かどうか、展示に耐えられる状態かどうか、大きさや運搬の可否を実見して確認しました。資料調査を重ね、得た情報から展示の趣旨をより精緻なものにしながら、展示資料を決めました。

### ②展示プラン

展示資料リストが確定すると、展示プランを作ります。これは展示テーマを詳細なコーナーに構成し、各々に必要な資料を編成した上で、実際の展示室を想定しながら資料を配置する計画を作る作業です。船展では、展示室内を仕切る壁を取り払い、開放的な空間を作り、一望できる形で和船の資料群を展示しました。同じ視野の中で見比べてみると、木造船船の造船技術の共



「船と船大工」展の展示風景

通性と多様性に気が付くことができるのではないかとアイデアでしたが、実際にこのようにレイアウトしてみると、思った以上に効果的でした。頭の中でシミュレーションしたプランが、思ったような効果をあげられるかどうかは、何度、企画展を手がけてもドキドキするところです。

実際に展示するモノをリストにして確定する傍ら、さらに精緻な調査を行います。船展では、船や船大工道具の実測図を作成しました。実測すること、船型や造船技術についてわかることもあり、実測図を展示することで詳細な情報を伝える事もできます。



大型資料(コウレンボウ模型)の搬入作業風景

### ③集荷搬入

展示する資料が他館や個人所蔵の場合、その所蔵者から展示のために貸出すことを了承してもらう必要があります。調査の過程で資料を寄贈していただくこともあります。船展で展示したコウレンボウ模型やマルキなどは、展示に際して借用したり寄贈を受けたらして、館外から運び込んだものです。

船展ではロビーなどにコウレンボウ模型等の大型資料を展示しましたが、これらの大型資料の搬入が難題でした。通常、展示資料の搬入にあつては、搬入口から展示室の資料搬入用扉まで、展示資料用の搬入経路を用います。搬入経路は、資料が損傷する危険性を最小限にするため、床面をフラットに整備してあります。ところが、展示した船は船体が九メートルと長く、通路の曲がり角で切り返せないため、この経路を使用することはできません。

そこで、通常は資料搬入には使わない部屋を通して、船を搬入することにしました。それでも、途中の扉の幅が船体の幅より狭いという難関がありました。輸送専門業者と事前に綿密な

打ち合わせを行い、最終的には鉄骨で金枠を組み、船体ごと吊り上げて横倒しにし、扉を通して搬入しました。資料の借用・集荷と展示室への搬入は、資料が傷む恐れのある作業です。損傷を出来る限り少なくするため、大変気を遣います。

## 3、資料から伝える

展示が興味深く、魅力が感じられ、楽しめるようにするため、資料の展示方法や展示空間に様々な工夫をこらします。

### ①クリーニング

使用痕などの汚れを除いて、展示の前には資料をクリーニングします。クリーニングは時間のかかる作業で、田舟のように小型の船でも、一点に半日はかかります。



木造船のクリーニングの作業風景

質や加工の技術、あるいは経年年月そのものをひと際はずきりと表わすことができます。様々な造作物を制作・設置して、資料を見やすくしたり、見映えを持たせたりします。船展では、展示資料の下に黒色のシートを敷き、資料のまとまりを表示しました。同時に木質の資料が多い展示空間を色彩的に引き締め、資料に視線を集中させる効果も持たせました。

### ②展示造作の制作・設置

また、現在開催中の「食の風景」展では、昭和初期の農家と三十年代の町家のお茶の間をイメージしたセットを組むことで、それぞれの食事の仕方が異なつていたことを表現しました。これらの展示造作は、担当者が作成した展示プランに基づいて、展示制作者と打ち合わせながら設計制作します。

### ③ライティング

展示制作の最終段階が、ライティングです。展示資料が見やすく、影がでないように、過不足無く照明を当てることがライティングの基本です。また、光や照明の熱による資料の劣化をできるだけ抑えることも重要です。そのため、企画展示室は、天井に照明用の電源レールが張り巡らされており、照明の着脱と光量の調節ができるように作られています。



ライティングの作業風景

照明の配置計画を作ります。次に、資料に対する光の向きや明るさを調整しながら、高さ四メートルの天井に照明を取り付けて行きます。照度計で光の強さを計測して、照度が一定になるように調節します。資料への照明の当て方により、資料の見映えや展示空間の雰囲気は大きく変化します。船展では、展示室中央に配置した木造船船に強く光をあて、周囲の地明かりの照度を抑えることで、展示室内で船の存在感が際立つようにはしました。逆に、食展の農家の食事のセットでは、わざと照明を二灯だけにして明るさを抑え、ランプ二つの当時の暮らしの雰囲気伝えるように意図しました。

このように三〇〇平方メートルという決して広い空間内に、幾重にも工夫を重ねることによって、展示は二層強い見ごたえを生み出します。



「食の風景」展 農家の食事セットの展示風景

## 4、企画展を運営する

企画展そのものを製作する一方で、限られた予算の中で事業として企画展を運営する必要があります。チラシ・ポスターの製作をはじめ、館外のみならず、個人・個人に協力をお願いしながら、より多くの人に企画展を見てもらう努力を行います。

### ①関連事業

展示解説会や講演会、体験プログラム等の関連事業を実施します。来館者に展示

## 5、おわりに

以上、企画展ができるまでを簡単に紹介しました。

アンケート調査の結果から、企画展を見ることを来館の目的とする利用者の割合は、年々大きくなっています。みなとびあに足を運ぶきっかけとしての企画展の役割は大きくなる一方で、「企画展をやっていることを知らなかった」「広報宣伝が足りない」といった、PR不足を指摘する意見もいただいています。関心はあるが企画展を開催していることを知らない層へ、どのようにアプローチするか今後の課題といえます。

新潟市は、新潟市歴史博物館の設置目的として「新潟市域の歴史的特性を明らかにし、市民の歴史に対する理解を深めるとともに、歴史を媒介とした市民交流を行うことにより、市民の社会的活動及び文化的活動に寄与する」ことを掲げています。みなとびあの企画展は、新潟市の歴史をテーマとし、実際に用いられてきた歴史資料を展示します。企画展示を見ることを通じて、実際のモノから触発を受け、他者との語りや交流が生まれる。このような歴史を介した市民の交流が深まるよう、工夫しながら企画展に取り組んでいきたいと思

(もり ゆきひと 学芸員)

平成十九年度 むかしのくらし展

# 食の風景

―食を支えた道具たち―

伊東 祐之

みなとびあ新潟市歴史博物館では、昨年の十一月二十四日から第四回のむかしのくらし展を開催しています。むかしのくらし展は、小学校社会科の単元に連携して、小学生にむかしの人々の暮らしの様子や工夫、努力を知ってもらおう企画展で、開館以来毎年テーマを変えて開催しています。今まで「ふゆのいがた」「あそび」「子どもと時代」「手回し機械の世界」展を開催してきました。今年のテーマは「食の風景―食を支えた道具たち―」です。

「食」に関するところが広範囲で多様ですが、今回は食にかかわる道具や文



書を表示しました。食事の場で用いられる膳やちぶ台、弁当箱、茶碗といった道具、食材の保存や調理に用いられる、みずがめ、かまど、羽釜、鍋、ほうろく、蒸籠などの道具、食材の購入と関係する、買物籠や秤、梱包木箱などの道具や値段表などの文書、戦中戦後の配給に関する文書、外食に関係する、岡持ちやかき氷機、大判焼き機などの道具や、食堂のチラシ、給食の献立表などの文書を表示しました。また、食の変化を示すモノとして、電気炊飯器やスーパーマーケットのチラシ、レトルトカレーのほうろく看板なども展示しています。

展示した道具は、基本的には昭和の初めから三十年代の、戦争を挟んだ時期のモノです。展示している道具には、鏝削りやすり鉢、かめなど、今も台所にあたり、使っていたりしているモノもあります。今もかまどに羽釜をかけてご飯を炊いている家がテレビで放送されることもあり、観覧した子供たちも「おばあちゃんの家にある」と言っています。道具というのは、伝統的に一定期間使われまわすし、それぞれの家で使っている時期も異なります。この展示で「むかしの道具」として考えているのは、スイッチのない、人が力を加えて動かして使う道具です。子供たちに、展示してある道具が何か分ってもらうために、道具の素材や使い方をていねいに説明したキャプションを付

けました。今の道具と比較するワークシートも用意しました。さらに、昭和初期の村と昭和三十年代の町の、それぞれの食事の様子イメージ再現を置き、今の道具と比較する助けとしています。スイッチの付いた道具が変わって、家事や暮らしがどう変わったのかということも考えてもらいたいと思っています。



かつてこれらの道具を使ったり、使っているのを見たりした大人たちには道具の説明は要りません。展示されている道具から、自分がすこした茶の間や台所、店など、道具のあった場の様子が思い浮かび、そこで起きたできごとが思い出されます。その食をめぐる思い出の情景と今の食のあり方と比べることで、家事や暮らしの変化を考えることができるのです。

また、展示室の壁面には、展示品から過去の情景を浮かび上がらせる触媒として、食に関する思い出を記したパネルを掲示しています。一年前から来館者に記入していただいていた食に関するアンケートから抜き書きしたものです。例えば、アンケートに書かれた、「お弁当に漬物しなく、内緒で鯨の缶詰をあけてつめて行き、ものすこく怒られました。」という思い出は個人的なものです。しかし、時代を共有した人々はこの思い出に共感し、自分の経験を思い浮かべるのです。こうして展示室のなかで過去と現在を行き来することができるようになった

(いとう すけゆき 学芸課長)

## 特集 3

# 反省を機に著作権を考える

小林 隆幸

このたび、当館企画展「西暦647年」制作にあたり、図の引用の不手際から図の原作者にたいへんご不快な思いをさせていただきました。この紙面をお借りして深くお詫び申し上げます。表1のように訂正いたします。これを教訓に、著作権の取り扱いには十分に注意を払い、今後はこうした不手際を犯さないという自戒の意味を込めて、この問題を取り上げ、著作権について考えてみます。

### (1) 問題の発端

今年度の夏に実施した企画展「西暦647年」に「西暦647年」の図(図1)を引用しました。その出典明記の際に、図を掲載している発掘調査報告書名と、その発行元である教育委員会名を表示し、金子氏の名を表記しませんでした。

報告書作成当時、金子氏は新潟県庁の職員で、県庁から三和村へ出向し調査に携わって報告書を作成されました。金子氏は村の職員ではなく、直接村の職務に従事する者が職務上行った業務ではないことから、報告書における氏の著作は職務著作に該当せず、氏個人の業績になります。社団法人著作権情報センターに確認したところ、同様なご教示をいただきました。したがって、今回の場合は、出所の明示方法(著作権法第48条の不備となり、金子氏に対しての著作権侵害となります。今回の図録の作成にあたっては、対象を研究者よりも一般読者に置き、気軽に手にとって見ることができ、ページ構成をめぐり、情報量も抑え、出典、参考文献等の表記もできるだけ簡潔にしました。その結果必要な情報が欠落するという不備が生じた。



図1 「西暦647年にいがた」展示図録

### (2) 著作物引用の問題例

金子氏は県の埋蔵文化財行政を担う文化行政課係長等を歴任され、現在は新潟県考古学会の会長もつとめておられます。金子氏は新潟県の考古学をリードされてきました。そのため、氏の著作物は県の考古学研究の基礎になるものが多く、参考引用されるものも数多くあります。そうした著作物の引用が繰り返されるうちに、原著者が不在の状態でも著作物だけが「入歩きし、他の出版物に登場することもある」とのことです。それによって、業績がその引用者の成果に置き換えられてしまうことにもなり兼ねません。特に氏が調べ上げた春日山城跡の平面図などはその典型例で、度々無断転用されているようです。

大なり小なり、同じように実績を無断で利用されるような経験を持つ研究者は多いと思われる。特に考古学などで多用する図表では、形をわずかに変えながら掲載が繰り返されるうちに、原著者の業績が隠れてしまうこともあるようです。当館の場合では、展示で再現した、ある歴史シーンが、当館で再現したことが触れられず立体物から平面へと姿を変えて印刷物で公表される例がありました。しかし、公共の施設である当館を利用していたら、たまたまの成果を重視し、特に問題視しませんでした。おそらく研究者の中にも、研究成果が活用されたことを評価し、著作権の侵害を大目に見ていた者も多いと思われます。著作権に対して甘さを生む原因は、こうした見逃しの精神に潜んでいるのかもしれない。

### (3) 博物館運営と著作権

博物館は文化財を取り扱うと同時に、館が生み出した知的財産を取り扱う場所でもあります。知的財産は著作権をはじめとする知的所有権によって、勝手に使用されるべきではありません。

こうした知的財産が発する博物館の情報が変わることなく共有されるためには、やはり著作権によつて保護されなくてはなりません。

このたび問題となった図録などの出版物のほか、知的情報の発信空間である展示室には、解説パネル映像、模型音楽など著作権の対象物が所狭しと並んでいます。博物館運営においては、他者の著作権を侵害しないことはもちろん、館の著作権を守る立場であることも念頭に置かなければなりません。当館の著作権は、当館だけではなく、映像、模型、写真、CGなど各個別の製作者にも帰属するため、そうした製作者の権利を守ることも考えなければなりません。

当館の常設展示室では、個人的な学習や思い出づくりに利用できるよう、展示製作者の同意のもと、写真撮影を認めています。資料への影響を考慮し、フラッシュや三脚利用を禁止しているもの、来館者にとって知的情報が得やすい状況にあります。そのため、当館の知的情報の二次利用が比較的容易であることは否めません。

博物館の利用者の多くは、著作権を意識しない。館の知的財産に触れていると思われまふ。公共の施設であつても著作権によつて保護され、展示のほか講演、講座などで得た情報に対しても同じように、勝手に利用してはならない、という意識づくりに必要になるでしょう。そのために、私たち博物館職員自身も、著作権の取扱いに十分な注意を払い、図録での引用で迷惑をおかけし

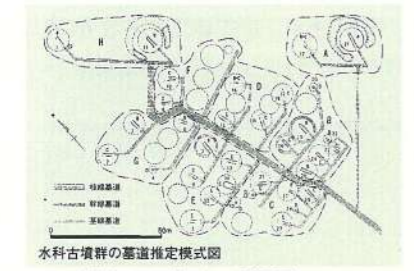


図2 出典表記に不備があつた引用図

### (4) 当館の出版物における課題

同図録において、出典参考文献表記に不統があつたことのご指摘も金子氏からいただきました。詳細まで表記したもので、そうでないものの混在が中にはありました。こうした点にも注意を払い、改善につとめたいと思います。

### (5) 今後に向けて

冒頭の通り、当館の展示図録において金子氏作成の図の引用に不備があり、ご迷惑をおかけしました。今もつて反省の念に駆られますが、私たちにとつては、著作権に対して問題意識が高まり、再認識できた好機にもなりました。金子氏からは今回の著作権のご指摘のほか、県の文化行政課にお勧めいただいた経験から、公の組織・機関に勤める者としての心がけや意識などについてのご教示もいただきました。そうした氏のご配慮にも感謝し、この経験を今後の博物館運営に活かしていきたいと思

表1 出典表記の修正(西暦647年にいがた「展示図録38頁」)

〔原〕三和村教育委員会「水科古墳群発掘調査報告書」(1980)より一部改変
〔正〕金子拓男作「西暦647年」(1980)より一部改変
〔水科古墳群発掘調査報告書〕(1980)より一部改変

# 常設展示室から — 収穫の風景ジオラマ —

常設展示室では、新潟市域の歴史を、港町と農村の2つのテーマに整理し紹介しています。

後半部が農村としての側面を紹介するコーナーで、そのメインとなる展示の1つが、今回紹介する収穫の風景のジオラマです。

このジオラマは、昭和20年代まで、新潟市域を含む蒲原平野の大部分で、どこでもみられた湿田での稲刈の様子を再現しています。

面積に限りのある常設展示室の中で、スペースの必要なジオラマという手法を使って、当時の風景を再現しているのは、耕地整理や土地改良事業によって、地域の水田の乾田化が進み、このような風景が、ほぼ完全に失われてしまったからです。



稲刈作業の再現

ジオラマの左側では、膝上くらいの深さの湿田の中での稲刈作業や、刈った稲を「カヤアゼ(ヨシの根茎部などでできた畦。増水時には水没する)」の上に、稲穂を下にして並べる「ナトリ」という水切りの様子などを再現しています。中央の手前側では、刈った稲を「キッツォ」と呼ばれる田舟に乗せて運んでいる様子を再現しています。

右側では、稲をかけて干すために田んぼの脇に列上に植えたハサ木にハサ縄をわたし、下から順に何段も稲束を掛けて行く「ハサかけ」の作業の様子も再現しています。

ジオラマの中の立体物のうち、人間や水面などは模型ですが、稲やハサ木などは実物を保存処理し、着色加工して配置してあります。

ハサ縄は地元でワラ細工の活動をおこなっている「黒崎民具保存会」のみなさんに製作してもらい、模型に設置する際の指導もお願いしました。キッツォは、亀田郷土地改良区が所蔵する実物資料を参考に、船大工の中川さん(秋葉区)に製作してもらい、エイジング(古色仕上げ)処理をして、使い込んだ感じを出しています。



キッツォとハサかけ作業の再現

展示の担当者である筆者はこういった景観を見たことがない世代なので、写真や文字記録、聞き書き調査などの資料によってプランを構成しました。そのプランをもとに展示を仕上げていきましたが、作業工程の要所所で、湿田での農作業を実際に体験していた世代の方々に見てもらい、助言や修正をもらいながらジオラマは完成しました。

背景画との一体感もあり、狭い展示室の中とは思えない広がりをもった展示となっています。今回紹介したほかにも見どころがたくさんありますので、じっくりとご覧ください。

(岩野 邦康 学芸員)



嶋悌司

「端麗辛口」の「新潟の酒」は、全国ブランドとして広く愛飲されています。本書は、新潟県醸造試験場で実際に「端麗辛口」の酒造りを指導され、後に朝日酒造で新銘柄「久保田」を誕生させた著者が、その開発の経緯やブランド等についてわかりやすく紹介したものです。

かつて「新潟の酒」は全体的に甘口でした。戦後、日本人の食生活が大きく変化する中で、嗜好の変化、時代の流れを読み取り、甘口から「端麗辛口」へと「新潟の酒」の味を大転換させることに著者は果敢に取り組みました。その結果、昭和五十年代のころに「新潟の酒」は「端麗辛口」の酒として定着します。本書では著者のこれまでの酒造りの経験、それを踏まえての酒造りの思いが語られています。是非本書を手にとり、著者の酒造りへの情熱に思いを馳せながら「新潟の酒」で一杯やってみてはいかがでしょうか。

(若崎 敦明 学芸員)

おすすめの二冊  
『酒を語る』 嶋悌司(著)  
朝日酒造株式会社(発行)  
二〇〇七年十月

# 館長日記

DIARY FROM THE DIRECTOR OF A MUSEUM

新潟市歴史博物館 館長 甘粕 健

## 抜荷で結ばれた鹿見島と新潟

NHK大河ドラマ「篤姫」が始まりました。ドラマの序章で存在感を示したのは平幹二郎の演じる薩摩藩の執政調所広郷です。調所は血も涙もない藩政改革を強行し、破産寸前の藩財政の建て直しに成功したばかりか巨額の資金を貯えます。しかし、薩摩藩が、実質支配をしていた琉球を舞台に、中国との密貿易で巨利を得ていたことが発覚し、幕閣の追求を受けることとなり、嘉永元(一八四八年)一人全責任を負って自殺します。

ドラマには出ませんがこの事件には新潟が深く関わっています。天保六(一八三五)年十一月、新潟近海で強風を受けた薩摩の密輸船が中条の村松浜に難破漂着した事件をきっかけに、薩摩の抜荷長崎を通さぬ不法な貿易の動かぬ証拠を幕府に握られることとなったのです。薩摩藩は薬種、毛織物、ベッコウ等の中国産の禁制品を船に積んで、日本海を北上、新潟で抜荷の唐物を売りさばき、代りに蝦夷地(北海道)の昆布、俵物(煎海鼠、干鮑、鱧鱈)等を積んで帰り、琉球経由で中国に輸出していたのです。

新潟の抜荷事件では新潟町を中心に多くの人が逮捕され江戸に送られ厳しい取調べを受け四七人に厳罰が下されました。また、幕府は長岡藩から、取り締まり不行届のことで新潟を召し上げ、幕府領としました。

薩摩の密貿易の片棒をかついでいた新潟は倒幕の原動力となった薩摩藩の蓄財を助けたとも言えるでしょう。また新潟が幕府領にならなかつたら多分開港五港に選ばれることはなかったし、新潟に県庁が来ることもなかったのではないのでしょうか。みなとびあの常設展には抜荷事件のコーナーがあります。特に神田陽子さんの講談仕立ての解説ビデオは好評です。

(あまかす けん 館長)



唐物運ぶ薩摩船(常設展示室映像「唐物抜け荷事件」より抜刷)

## ◎ 収蔵資料紹介

### 信濃川新洲相論に付き 沼垂町他認出掛紙かぶせ絵図

新潟町会所文書

この絵図は、天保二(一八一三年)の信濃川河口付近の絵図に、安永五(一七七六年)、延享四(一七四七年)、延宝八(一六八〇)年の、その二部を描いた絵図を、天保と同じ場所に重ねて貼り付けた絵図です。この形態の絵図は、「掛紙貼り」とか「かぶせ」と呼ばれました。新潟町会所沼垂町役所文書には、掛紙をかぶせた絵図が多く含まれています。

この絵図は、新たにできた信濃川の中洲(現在の水島町のあたり)が、この町村のものかをめぐって争った際に、沼垂町・下所島新田・天神尾新田が証拠として

提出した絵図の写です。信濃川河口では、信濃川が運んできた土砂によって多くの新しい島ができました。江戸時代の初めから、新潟町と沼垂町などは、度々中洲の帰属を争って来ました。掛紙を上からめぐっていくと、中洲がどのように変遷してきたか、分かる仕組みになっています。

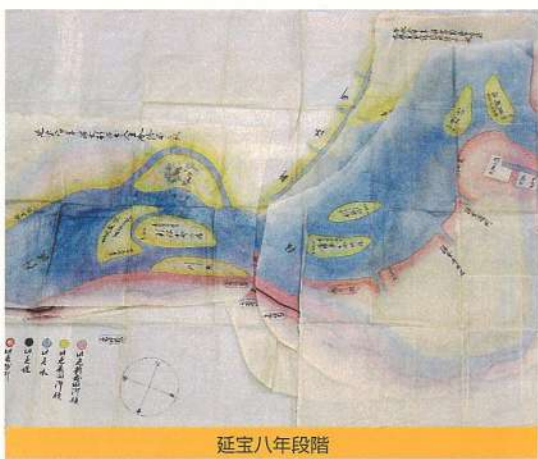
掲載した二枚の写真は、すべての部分図を上貼り付けた番古(延宝)の状態と、貼つてある絵図をめぐってひろげた、天保の状態を示した写真です。

信濃川を挟んで、長岡領であった新潟町と、新発田領

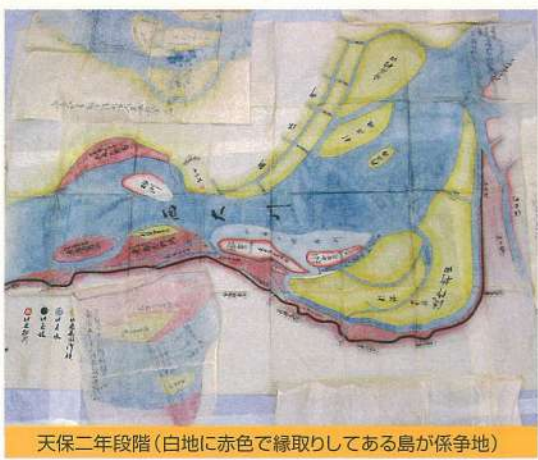
であった沼垂や下所島新田などの村々が描かれています。黄色が長岡領、赤色が新発田領に属する土地です。延宝の絵図では、まだ信濃川に阿賀野川が河口で合流しています。天保の絵図では、「西大川」(信濃川)に中洲が点在しています。右下に「流作新田」と記された所は、現在の新潟駅周辺ですが、かつては信濃川の流れの中にできた中洲だったことがわかります。

このように、この絵図は、江戸時代の信濃川河口、新潟の姿の変化を示す貴重な史料です。また、絵図としても、掛紙をかぶせた形態が興味深い史料です。今後、企画展等で紹介したいと思っています。

(長谷川 伸 学芸員)



延宝八年段階



天保二年段階(白地に赤色で線取りしてある島が係争地)